

職名	平時人員	加臨時人員	計	備考
醫師	二	六	八	院長ハ陸軍軍醫學校長ナルヲ以テ同校學生中ヨリ臨時増減ヲ行ヒ得ルコト、セリ
醫務取扱員	一九		一九	
以上無給嘱託者				内一名齒科嘱託
醫師	二		二	
調劑員	三		三	
事務員	一		一	
書記	四		四	
看護婦	一		一	
看護婦	二		二	
看婦	二		二	
厨夫	三		三	
火夫	四		四	
雑使	八		八	
合計	八六	四八	一三四	

主要職員氏名表

病院 長(嘱託) 醫博岩田 一
 内科第二部長(同) 出井淳三
 内科第一部長(嘱託) 醫博藤浪 正
 外科第一部長(同) 醫博岩崎小四郎

外科第二部長(同) 田島清十郎
 眼科第二部長(同) 今西武夫
 耳鼻咽喉科第二部長(同) 高木小三郎
 皮膚科第二部長(同) 醫博岩崎小四郎
 レントゲン科部長(同) 醫博岩崎小四郎
 第三内科(病理)部長(同) 醫博柏木正俊
 調劑長(同) 田口文太
 内科醫務取扱(同) 桃井直幹
 同(同) 毛利晃
 外科醫務取扱(同) 竹内又佐
 眼科醫務取扱(同) 横松 鴻
 耳鼻咽喉科醫務取扱(同) 川名達雄
 皮膚科醫務取扱(同) 森 島 武
 レントゲン科醫務取扱(同) 島 居 環
 醫 員 武 田 信
 調劑員 淵岡喜久治郎
 同 一本木 悦太郎
 同 堀尾方義
 同 川口光恵
 看護婦長 前田ノア
 備考 一、本表中には臨時期間中に交代したる者あり。

眼科第一部長(同) 醫博石津 寛
 耳鼻咽喉科第一部長(同) 醫博岩田 胤次
 皮膚科第一部長(同) 弘岡道明
 口腔科部長(同) 三内多喜治
 細菌科部長(同) 醫博西澤行藏
 第四内科(臨床)部長(同) 醫博小泉親彦
 事務長 守屋市一郎
 内科醫務取扱(嘱託) 奥田四郎
 外科醫務取扱(同) 大島敬三
 同 後藤謙枝
 耳鼻咽喉科醫務取扱(同) 野本謙雄
 皮膚科醫務取扱(同) 渡邊重治郎
 口腔科醫員 小笠原胤長
 醫 員 矢 島 知 秀
 調劑員 武子甲之太郎
 同 岡本幸雄
 同 横 林 淳
 同 菊池元起
 同 石井惣太郎

第三編 第二章 臨時勤町病院

- 二、嘱託職員は無給とす。
- 三、本表外醫員の勤務に當れる陸軍軍醫學校學生たる陸軍軍醫多數あり。

第三節 作業實施の狀況

一、患者の取扱及其成績

震災後短時日の小康を経て、九月中頃から本會の積極方針に基き、本院にても極力施設を増加し病室の如きも平時の八十床に非常増加を以て二百床とし、治療券に依る患者の制限を撤廢し一方には宣傳に努めたる爲め、入院外來共に續々増加し、新築並修繕工事に煩はされつゝも、常に最大能率を擧げて臨時救療に従事した。其間患者に充分なる満足を與へ、職員其他に特に擧ぐべき事故なく、六月末圓滿に事業を終了することを得た。此間に取扱つた患者の數は

入院 八百八十六名

其の收容延日數 三萬六千八百三十四日

外來新患 六千九十四名
 再來を加へて 四萬八十五名

に上つて居る。今之れを各種の統計表に現はして見れば次の表に見る如くである。

自大正十二年九月 至大正十三年六月 外來往診患者月別轉歸表 臨時廻町病院調査

月別	越患者		新患者		計	轉			歸		治療中	治療日數
	男	女	男	女		全治	輕快	收容	死亡	其他		
大正十二年九月	一〇	一六	四	七	二一	一六	一	一	一	一	一〇	一〇
十月	三〇	三〇	三	七	七〇	六六	三	一	一	一	三〇	三〇
十一月	三九	三六	三	七	一〇五	九七	七	一	一	一	三〇	三〇
十二月	五九	五五	三	七	一七四	一六〇	一〇	一	一	一	三〇	三〇
一月	三九	三六	三	七	一〇五	九七	七	一	一	一	三〇	三〇
二月	四〇	三六	三	七	一〇六	九七	七	一	一	一	三〇	三〇
三月	四一	三六	三	七	一〇七	九七	七	一	一	一	三〇	三〇
四月	四二	三六	三	七	一〇八	九七	七	一	一	一	三〇	三〇
五月	四三	三六	三	七	一〇九	九七	七	一	一	一	三〇	三〇
六月	四四	三六	三	七	一一〇	九七	七	一	一	一	三〇	三〇
計	三三三	三〇〇	二一	五七	七一七	六六〇	五〇	一	一	一	三〇	三〇

病類	男	女	計	全治	輕快	死亡	其他	治療中	計
麻疹	1	2	3	1	3		1		1
流行性感冒	1	1	2	1	1				2
赤痢	1		1						1
丹毒	1		1						1
嗜眠性腦炎	1		1						1
破傷風	1		1						1
アケチノミコーセ	2		2						2
肺結核	6	3	9	1	3	1	6	1	12
腦及結核	5	1	6	1	1	1	3	1	7
神經系及結核	2		2						2
腸及腹膜ノ結核	8	1	9	1	5	1	2	1	10
脊椎ノ結核	1		1						1
關節ノ結核	3		3						3
骨ノ結核	1		1						1
淋巴系ノ結核	2		2						2
泌尿生殖器ノ結核	3		3						3
第二期微毒	1		1						1
其他ノ微毒	4		4						4
軟性下疳	1		1						1
淋症	4		4						4
膿毒症及敗血症	2		2						2

自大正十三年六月 收容患者病類別轉歸表 臨時廻町病院調査

病類	男	女	計	全治	輕快	死亡	其他	治療中	計	月別	
										越患者	新患者
六	4	2	6	2	2	1	1	2	2	大正十二年六月	1
五	3	1	4	1	1	1	1	1	1	大正十二年五月	1
四	2	1	3	1	1	1	1	1	1	大正十二年四月	1
三	1	1	2	1	1	1	1	1	1	大正十二年三月	1
二	1	1	2	1	1	1	1	1	1	大正十二年二月	1
一	1	1	2	1	1	1	1	1	1	大正十二年一月	1
同	1	1	2	1	1	1	1	1	1	大正十三年六月	1
十	1	1	2	1	1	1	1	1	1	大正十三年五月	1
十一	1	1	2	1	1	1	1	1	1	大正十三年四月	1
十二	1	1	2	1	1	1	1	1	1	大正十三年三月	1
十三	1	1	2	1	1	1	1	1	1	大正十三年二月	1
十四	1	1	2	1	1	1	1	1	1	大正十三年一月	1
十五	1	1	2	1	1	1	1	1	1	大正十三年六月	1
十六	1	1	2	1	1	1	1	1	1	大正十三年五月	1
十七	1	1	2	1	1	1	1	1	1	大正十三年四月	1
十八	1	1	2	1	1	1	1	1	1	大正十三年三月	1
十九	1	1	2	1	1	1	1	1	1	大正十三年二月	1
二十	1	1	2	1	1	1	1	1	1	大正十三年一月	1
計	10	10	20	10	10	10	10	10	10	大正十三年六月	10

自大正十三年六月 收容患者月別轉歸表 臨時廻町病院調査

第三編 第二章 臨時廻町病院

病類	男	女	計	全治	輕快	死亡	其他	治療中	計
原因不示サ、ノ麻痺	五	一	六	一	一	一	一	一	六
癩	一	一	二	一	一	一	一	一	二
神經痛	二	二	四	一	一	一	一	一	四
神經衰弱	一	一	二	一	一	一	一	一	二
神經衰弱	一	一	二	一	一	一	一	一	二
其他ノ疾	二	二	四	一	一	一	一	一	四
眼及附屬器ノ疾患	二	三	五	一	一	一	一	一	五
耳及乳嚔竇ノ疾患	一	一	二	一	一	一	一	一	二
心臟膜ノ疾患	一	一	二	一	一	一	一	一	二
心臓衰	一	一	二	一	一	一	一	一	二
痔核	一	一	二	一	一	一	一	一	二
淋巴系ノ疾患	一	一	二	一	一	一	一	一	二
鼻腔及附屬器ノ疾患	二	一	三	一	一	一	一	一	三
喉頭ノ疾患	二	一	三	一	一	一	一	一	三
急性氣管支炎	三	一	四	一	一	一	一	一	四
氣管支炎	一	一	二	一	一	一	一	一	二
肺炎	一	一	二	一	一	一	一	一	二
肋膜炎	一	一	二	一	一	一	一	一	二
喘息	五	一	六	一	一	一	一	一	六

一八一

病類	男	女	計	全治	輕快	死亡	其他	治療中	計
口腔ノ痛	一	一	二	一	一	一	一	一	二
胃、肝臓ノ痛	一	一	二	一	一	一	一	一	二
直腸ノ痛	一	一	二	一	一	一	一	一	二
子宮ノ痛	一	一	二	一	一	一	一	一	二
乳房ノ痛	一	一	二	一	一	一	一	一	二
皮膚ノ痛	一	一	二	一	一	一	一	一	二
其ノ他ノ臓器ノ痛	一	一	二	一	一	一	一	一	二
急性關節レウマチス	二	一	三	一	一	一	一	一	三
慢性關節レウマチス	三	一	四	一	一	一	一	一	四
脚氣	九	一	一〇	一	一	一	一	一	一〇
糖尿	二	一	三	一	一	一	一	一	三
バセドウ氏病	二	一	三	一	一	一	一	一	三
白血病	二	一	三	一	一	一	一	一	三
アルコール中非	一	一	二	一	一	一	一	一	二
モルヒネ慢性中毒	一	一	二	一	一	一	一	一	二
腎炎	四	一	五	一	一	一	一	一	五
脊髄炎	二	一	三	一	一	一	一	一	三
脊髄炎	二	一	三	一	一	一	一	一	三
其ノ他ノ疾	六	三	九	一	一	一	一	一	九

一八〇

骨	不慮ノ火傷	燻ニ依ル自殺未遂	關節ノ疾患	骨ノ疾患	濕疹	其ノ他ノ皮膚ノ疾患	蜂窩織炎及急性膿瘍	え	癩	瘰癧	乳癌	子宮ノ良性病	卵巣囊腫	男子生殖器ノ疾患	尿道ノ疾患	膀胱ノ疾患	腎臓ノ疾患	附屬器ノ疾患	其ノ他ノ腎臓及	侵性腎臓炎		
一	一	八	九	五	三	七	一	二	四					七	二	一	一	一	三	二		
五	六	一	四	三	一	一	五	二	一	三	四	一	九							一	五	
二	二	一	一	二	六	四	一	二	三	三	四	三	四	一	九	七	二	一	一	二	四	六
一	六	三					二	一	一		二	八										
九	四	八	一	五	一	九	二	三	三	三	二	一	一	六	一	一	一	一	一	二	六	
一																					二	七
三	一	一	一	二																	三	
二	二	一	一	二	六	四	一	二	三	三	四	三	四	一	九	七	二	一	一	二	四	六

急性腎臓炎	腹膜炎	膽石	肝臓硬変	肛門及直腸ノ疾患	其ノ他ノ腸ノ疾患	腸管閉塞	脱腸	蟲様突起炎	其ノ他ノ腸ノ寄生蟲	十二指腸蟲病	同上 二歳以上	下痢及腸炎 二歳未満	其ノ他ノ疾患	胃及十二指腸ノ潰瘍	食道ノ疾患	咽喉及扁桃腺ノ疾患	口腔及附屬器ノ疾患	肺氣腫				
四	三	二	一	三	二	二	一	五	三	一	一	一	一	一	五	一	二	二				
五	二	一	二	一	一	一	一	九		三	一	一	一	一	二	一						
九	五	三	三	四	三	七	二	一	五	四	二	一	一	三	二	一	六	一	四	二		
一								二	〇													
六	二	二	二	二	二	八	一	二	四	一	一	一	一	三	一	一						
二	二							三				一	二	三								
一	一	一																				
三	一	一																			三	
二	二	一	一	二	六	四	一	二	三	三	四	三	四	一	九	七	二	一	一	二	四	六

病類	計		全治	輕快	死亡	其他	治療中	計
	男	女						
挫傷	五六〇	三二六	一二四	四七二	一六五	二九	九六	八八六
脱臼	二四	四	一一	一三	一	一	一	二八
計	五八四	三三〇	一三五	五〇五	一六六	三〇	九七	九一〇

備考

- 一、本表人員には震災前分院繰越患者七十六名を含む。
- 二、治療中の人員九十六名は臨時病院閉鎖の際廻町分院に引渡せり。
- 三、轉歸に於て全治少なくして輕快甚だ多數なるは病症通院し得る程度に達すれば輕快として退院せしめ以後外來患者として治療するに因る。
- 四、本表病類は大正十三年三月内閣訓令第一號小分類に準し調製せり。

自大正十二年九月 患者診療科別表 臨時廻町病院調査

科別	外來、往診		收容		計
	男	女	男	女	
内科	一、四六〇	一、二〇四	二、六六四	一、五〇〇	三、八七〇
外科	七四一	四一八	一、一五九	一〇二	三、一四
眼科	四五四	五二八	九八二	三六	六六
耳鼻咽喉科	四七二	三七二	八四四	三〇	七九
皮膚科	五四二	三七八	五二〇	一四	五七
計	三、七五九	三、〇五八	六、八一七	三、四六	九、四八

口腔科	計
九〇	一五八
三、七五九	二四八
	六〇二
	一四
	四五

備考

- 一、婦人科は外科に小兒科は内科に含む。
- 二、同一人にして二科以上に亘る患者は其各科に重複計上せり。

自大正十二年九月一日 外科手術表 臨時廻町病院調査

病名	人員	手術方法	轉歸	
			全治	輕快
結核性頸腺炎	二三	摘出	〇	二
肋骨炎	一四	開胸術	一	一
膿胸	一	上肺摘出術	一	一
肘關節結核	一	搔剔術	一	一
掌骨關節結核	二	大骨摘出術	一	一
膝關節結核	一	腐骨摘出術	一	一
跟骨結核	一	下腿截斷術	一	一
足根骨結核	三	除膿術	三	一
副乳結核	三	試驗的開腹術	一	二
陰莖癌	一	根部切斷除根術	一	一
計	一〇〇		一〇	一四

慢性化膿性中耳炎	病名	人員	手術方法	轉	
				全治	輕快死亡其他治療中
四				四	

自大正十二年九月一日至大正十三年六月三十日 耳鼻咽喉科手術表 臨時麴町病院調査

備考 本表には比較的大なる手術のみを掲ぐ

子子宮筋腫	子子宮脱	大陰唇滯留囊腫	骨髄炎	骨折	異物滞留(針)	化膿性筋炎(大胸筋)	化膿性乳腺炎	兔唇	舌繫帶畸形	火傷後手指畸形	瘻痕性瘻縮	植皮	計
一	一	一	三	五	四	一	五	二	一	一	一	二〇	一
摘除術	摘除術	摘除術	腐肉取出術	線骨縫合術	摘出術	切開術	切開術	整形術	整形術	整形術	整形術	クチラルウシセ氏法	
一	一	一	二	三	四	一	五	二	一	一	一	一	一七
													一四
													七
													六

卵巣腫	陰囊腫	翠丸腫	脫肛	肝膿瘍	穿孔性腹膜炎	痔瘻	肛瘻	痔瘻	痔瘻	腸重疊	鼠蹊ヘルニア	蟲癢突起	疾核腫	織維腫	切斷端神經腫	兩下肢特發性脱疽	上頸頸	足部扁平上皮癌	乳腺癌	病名
八	一	一	三	一	一	八	二	二	二	一	一	七	二	一	一	一	一	一	三	
摘出術	摘出術	摘出術	銀線法	開腹術	開腹術	摘出術	燒灼	切開	切開	切開	根除及吻合術	根治術	根治術	燒灼	摘除	大血管外膜剝離術	切斷	下腿截斷術	切斷	
七	一	三	三	三	二	一	一	一	一	一	一	七	二	一	一	一	一	一	二	

病名	人員	手術方法	全治	輕快	死亡	其他	治療中
トヲホムパンヌス	五	パケン焼灼	二				
角膜葡萄腫	三	角膜切除	三				
虹彩毛様體炎	八	虹彩摘出術	六				
瞳孔閉鎖症	一	虹彩摘出術	一				
色素性網膜炎	二	網膜剝離術	一				
白內障	三七	虹彩剝離術	二				
綠內障	一三	虹彩剝離術	八				
硝子體濁	三	硝子體取出術	四				
硝子體出血	一	硝子體取出術	一				
眼窩蜂窠織炎	一	眼窩內容除去術					
眼球癆	四	眼球摘出術	三				
眼瞼下垂症	一八	眼瞼手術	一五				
麥粒腫及霰粒腫	一八	切開手術	一八				
眼瞼内腫	六四	切開手術	六四				
斜視	一三	前轉又は後轉手術	一三				
翼狀脈	一三	切除術	一三				
慢性淚囊炎	四〇	摘出術	四〇				

自大正十二年九月一日至大正十三年六月三十日 眼科手術表 臨時麹町病院調査

病名	人員	手術方法	全治	輕快	死亡	其他	治療中
急性乳旁突起炎	一〇	シユワルツエ氏手術	九				
慢性上顎竇蓄膿症	四	根治手術	三				
前額竇蓄膿症	三	根治手術	三				
篩骨竇蓄膿症	一	根治手術	一				
蝶竇蓄膿症	一	根治手術	一				
鼻中隔彎曲症	九	竇狀切開手術	九				
鼻	一七	絞斷手術	一七				
慢性肥厚性鼻炎	二	甲介切手術	二				
眞性鼻鼻症	一	切除術	一				
口蓋扁桃腺肥大	三	切除術	三				
舌根扁桃腺肥大	一	切除術	一				
扁桃腺周圍膿瘍	一	切開術	一				
咽頭後膿瘍	一	切開術	一				
腺樣增殖症	四	切除術	四				
食道異物	一	摘出術	一				
喉頭全摘出術	一七二	喉頭全摘出術	一五五				

病名	人員	手術方法	轉歸	
			全治	快死
眼症	一	植皮術	二	一
計	二四六		二二	三
			一	四
				八

自大正十二年九月 至大正十三年六月 皮膚科手術表 臨時麴町病院調査

病名	人員	手術方法	轉歸	
			全治	快死
横痃	一〇九	切開及摘出	一〇八	
皮下蜂窠織炎	五	切開	五	
膿瘍	四	切開	三	
粉瘤	四	摘出	四	
陰囊腫	六	切開	四	
除水腫	三	切開	三	
頸部化膿性淋巴腺炎	一	切開	一	
計	一三二		二二八	三
				一

二、防疫業務及傳染病取扱

災後日を追ふて外來患者中に腸チフス赤痢等の傳染病を發見するに至つた。然るに院内には臨時隔離すべき場所乏しく、地方傳染病院に送る迄、門衛所に假設したる一室を之に充て、時には異なる病種の患者を雜居せしめざるを得ぬ有様であつたが、大正十三年一月から新築假病舎の落成により、隔離を完全にすることが出來た。本院で傳染病と診定して傳染病院に送つた患者の數は六十一名であつて、其種類別は次表に示す如くである。

又院内防疫に就ては災後特に注意を拂ひ、十一月大阪市に虎列拉の發生したる時、翌年一月東京に痘瘡の流行を見むとしたる時、次で六月静岡縣に腺「ペスト」を發生したる時等、各々之に應じて外來人及院内搬入品の検査的所置、職員患者の種痘等、適切なる豫防手段を施したる外、種痘の如きは極力之を一般に宣傳して外來患者にも多數に實施した。

自大正十二年九月 至大正十三年六月 法定傳染病取扱人員表 臨時麴町病院調査

病名	外來往診患者	收容患者	計
腸チフス	二八	一一	三九
赤痢	一三	二	一五
ヤフテリ	三	三	六
強フ	一	一	二
計	四五	一六	六一

備考 赤痢收容患者一は肺結核にて收療中特發したる者にして全く當院に於ける發生患者なり。

第四節 高貴の行啓、台臨、御下賜品傳達

皇后陛下 行啓

大正十二年十一月十九日畏くも 皇后陛下には本院に行啓仰出された。先是本院では十一月十六日本部からの豫報を受け、十七日には三條宮内事務官外三名來院の上、思召を内示して院長と訂合せをした。當時本院には便殿に供し奉るべき室なく、空室は總て非常收容に充て、唯狹隘なる

醫員假食堂の一室を除すばかりであつて、而も地震の爲め壁は龜裂剝落して居り、茲に便殿を設へ奉ることは恐懼に堪へざる次第であつたが、患者の爲めに空室を充てたる爲に他に室の無いと云ふ事は、却て思召に副ひ奉り、御満足遊ばさるゝ事と拜察し奉るとの事であつた。

十九日には秋晴の天明かで 陛下には竹屋權典侍御陪乘、大森皇后宮太夫其他の供奉にて、午後一時二十分御着輦あり、御先著の總裁閑院宮殿下を始め奉り、徳川會長、蜂須賀副會長、小橋事務取扱、北里醫務主管、池田社會局長官、山田陸軍省醫務局長、山田衛生局長、宮島參事以下本部の各部長、岩田院長、其他病院職員等奉迎し、徳川會長の御先導にて便殿に入御あらせられ、總裁殿下と御對顔の後、正副會長、小橋、北里、池田、兩山田及岩田病院長に拜謁仰付けられ、病院長より病院の概況を聞召されたる後、病院長の御先導にて各室を御巡閱遊ばされ、病床に御衣の觸れむ計りに御近づき遊ばされて、病院長の言上を仔細に聞召されつゝ、多くの患者に御言葉を賜ひ、特に病院長に災時の患者避難所を御下問あり、且救療上に就き優渥な

る御言葉を賜り、再び便殿に入御あらせられ、御小慰の後御間もあらせられず、午後二時職員等奉送裏に還啓仰出された。

奉送直後、院長は各病室に至つて難有御言葉を患者に傳達し、次で職員一同を集めて優渥なる思召を傳へたるに、孰れも陛下の患者を憐ませ給ふの篤きに恐懼感泣した。

當日供奉員に進呈した書類は言上書、現在患者表、收容、外來に區分したるもの數種、及職員名簿の三であつた。

閑院宮載仁親王殿下 台臨

大正十二年九月十八日 總裁宮殿下には本院に台臨あらせられ、先着の徳川會長、蛸須賀副會長、北里醫務主管、島田理事長、岩田病院長等の御出迎を受けさせられ、玄關脇に設けたる天幕の御小慰所に入らせられ、岩田院長拜謁を賜りて震災に關する病院概況を報告し奉り、終りて患者の狀況御巡閱の後、正午御歸還遊ばされた。

山階宮大妃殿下 台臨

大正十二年十月四日 山階宮大妃殿下には、武彦殿下御同列にて本院に台臨遊ばされ、先着の二條理事長、大畑、牧山各部長、岩田院長以下病院職員等の御出迎を受けさせられ、醫員假食堂に設けたる粗末なる御小慰室に御案内申上げ、岩田院長より患者概況を申上げたる後、多數の外來患者の間を御通過あらせられ、各病室に就て患者を御慰問遊ばされ、且つ收容患者各自に御菓子を賜はつた。

御下賜品傳達

大正十二年十二月二十五日畏くも
皇后陛下罹災患者の寒苦を憐ませ給ひ、綿入衣服を下賜し給ふ。病院長は天恩の無極に恐懼感激し、殿に傳達式を施行して患者一同に對し次の式辭を述べ、鄭重に之を傳達した。

御下賜品傳達の式辭

畏くも

皇后陛下に於かせられましたは平常あなた方病氣に惱む人々の身上を御心に懸けさせられ震災以來はとりわけ御心を注がせ給ひ曩には此病院に行啓あらせられてあなた方に親しく御慰問を賜ひたるは今更申す迄もなく誠に有り難い事であります。其上日に増す寒さの今日此頃は一入難儀の事であらうと思召されました此着物をあなた方銘々に下し賜はる事となりました。これは御手元の費用を御節約遊ばされて調へさせられそれを御自ら御縫ひになる御心持を以て宮内省の女官方や女子學習院其他の女學校の教員生徒等が此の有難い思召を承つて仕立てたものであります。之れは申迄もなく暖く着物を襲ねて芽出度新年を迎へ厳しき寒さをも凌ぎ早く全快せよとの濕き思召より出でたるものと拜察致します。

先帝陛下 今上陛下の厚き大御心に基きたる此病院に入りてあなた方は治療を受けらるゝ其上今又此様の賜を頂戴致さるゝは實に重ね重ねの御高恩を受けらるゝ事でありまして 陛下御仁慈の程は申上ぐるも勿體なき次第であります。之を御傳へ申す吾々に至る迄難有さの餘り涙のこぼるゝ計であります。此深く高き海山の御恩に報い奉るには只管養生を怠らず一日も早く元の達者なる身體となる事でありませぬ。尙退院して後は充分に銘々に仕事を勵み必ず御國の御役に立つ様にと一途に心懸ねばなりません。今難有御下賜品を只今あなた方に御傳達致しました序を以て念の爲め以上の注意や希望を述べて置く次第であります。

大正十二年十二月二十五日

恩賜 財團 済生會臨時麹町病院院長陸軍軍醫總監從四位勳二等功五級 醫學博士 岩 田 一

大正十二年十月一日

秩父宮殿下外十三宮家より現在收容患者全部に對し各自に木綿袴着物を下賜せられた。院長は御思召を傳へて患者に傳達し翌二日各宮邸に參上して御禮を申上げた。

第五節 篤志家の慰問及慰安

江湖篤志家の來問は震災後一時多數に上り中には生花鉢植等を寄贈して、患者を慰安せられたるもあつた。是等の人々の好意に對しては茲に特に感謝の意を表する次第である。

大正十二年九月十九日

芝増上寺救護班員として松野了停、本田芳演、岩田謙應氏來院患者を慰問す。

同 年十月二十一日

希望社長後藤藤静香氏、同社贊助會員埼玉縣下各小學校兒童代表者北足郡川口尋常高等小學校長佐久間得三氏、同社奏樂部員數名を同伴來院、生徒等の採取したる草花を患者に寄贈し、各室患者を慰問す。

同 年十一月四日

半込區新小川町基督教會日曜學校生徒三十名教師今泉柳隆氏引率の下に來院し、草花を寄贈し患者を慰問す。同 年十一月十八日

東京市外下目黒日出高等女學校長小林芳次郎氏生徒數名を伴ひ來訪し、患者に草花を贈る。

大正十三年二月二日及二月二十二日

日本女子大學櫻楓會會員數氏來院患者を慰問す。

同 年四月二十日

賀川豊彦氏主宰基督教産業青年會會員十三氏來院、患者を慰め切花を贈る。

同 年六月一日

番町教會日曜學校教師三島隆吉氏生徒四十名を伴ひ來り、此の日「花ノ日會」を催したる趣を以て、入院患者を慰問し生花鉢植等を寄贈せり。

同 年六月十五日

日本基督教牛込教會日曜學校代表者池松昌氏生徒二十餘名を伴ひ來院、此の日「花ノ日會」を催したる趣を以て、入院患者を慰問し生花鉢植を寄贈せり。

第六節 事業整理

大正十三年六月末日を以て打ち切るべき臨時事業を整理する爲めには、既に四月以降漸次其方針を以て患者の制限を行ひ、人員を整理して災前の定員に復し、圓滿に目的を達するを得た。只だ收容患者の退院のみは、病症の關係上充分意の如くならず、六月末に於て平時の定員八十名を超過すること十六名に及び、餘儀なく之を其儘經常事業に引續ぐ事になつた。

七月以降本院の名稱も「恩賜財團濟生會病院麹町分院」なる舊稱に復した。災前の施療病床の外、三十床の有償病床を殘置したのは本會一般の方針に基くものである。

第三章 臨時下谷病院

第一節 施設 (敷地、工事、病床、暖房、炊事、職員)

本院は本會の臨時救療事業擴張に伴ひ臨時病院を設立するに當り、東京市内の細民多き方面にて且つなるべく罹災焼失區域に敷地を求め、既に警視廳に於て假病院設立の目的を以て選定したる土地を其計畫と共に繼承し、下谷區龍泉寺町三百七十九番地に在る戸田伯爵所有の廣大なる敷地を同伯爵の好意に依り無料にて借受くることを得、此所に總建坪八百坪の木造、バラック式病院を建て、十一月初め起工し、工事の間は臨時赤羽病院内に假事務所を置いて諸般の計畫を進め、十二月一日竣工と同時に本院に移り、十二月三日始めて患者を取扱ふに至つた。

病床の數は二百餘を常設してあつたが非常收容としては三百人を容れる計畫であつた。齒科を除く各分科を設備し、職員から材料から總て新

に設置した。殊に冬期に於ける患者の防寒に對しては、木造裸造りの建物に對して、最も火氣に注意警戒を要するを以て、炊事消毒等と共に暖房一切に蒸汽を用ふる事とし、蒸汽機關を据ゑ付けたのであるが。材料と職工とを集めるのに困難を生じて、工事が容易に捗らず、漸く一月中旬に至つて炊事に間に合ひ、同月下旬一部の暖房に使用し、更に全部の暖房に通じたのは二月二十日であつた爲め、勢ひ夫迄は炭火を使用せねばならぬ状態であつた。

食餌は請負とし、病院の炊事場を貸して調理せしめた。契約價格の單價は次の通りである。

職員	一日三食常食五十五錢
	朝食 十五錢
	晝、夕各食二十錢
患者	一日常食軟菜四十五錢
	朝食 十一錢

晝夕各食十七錢
同 粥食卯菜三十六錢
朝晝夕各食十二錢

本病院職員の現員及主要職員の氏名は次の通りである。

職員現員表 (大正十三年四月現在)

職名	現員	職名	現員	職名	現員
院長	一	調劑長	一	看護婦長	一
副院長	四	調劑員	六	看護婦	四〇
醫長	二	事務長	一	備人	二〇
醫員	二	書記	四	合計	九〇

主要職員氏名表

院長 醫學博士 茂木藏之助
(大正十三年一月三十一日退任)
副院長 醫學博士 福島東作
外科醫長 醫學博士 梅村六郎

臨時下谷病院

院長 醫學博士 前田友就
(大正十三年一月三十一日就任)
外科醫長 犬養六郎
婦人科醫長 長澤義郎

職名	現員	職名	現員	職名	現員
小兒科醫長	菊地新治郎	醫員	菅井保	同	同
同	堤信彦	同	村山輝	同	同
同	森信	同	高瀬	同	同
同	飯田勝助	同	丹羽直	同	同
同	井城三雄	同	樋渡光太郎	同	同
同	小春綠郎	同	鶴見ちさよ	同	同
同	堀江弘	同	桑原富二	同	同
同	川本幸三郎	同	森田孝吉	同	同
同	大關清三郎	同	池田一子	同	同
同	柴田直二	同	藤本高生	同	同
同	石田耕造	同	横澤峯雄	同	同
同	石井明治	同	町田文雄	同	同
同	木村達也	同	市川ヒテ	同	同

第二節 作業及其成績

本病院は下谷、淺草の罹災焼失地域に近接し、且つ日暮里三河島等細民の密集區域からも便利良く好適の位置を占め、職員亦本會の趣旨を體して大に精勵したる爲め、患者の來集する者多く、罹災後の臨時施設として成功したるのみならず、永久に社會的醫療機關として本會の臨時事業撤廢

後も尙ほ存続を必要とするに至り、大正十三年六月末之を東京府醫師會の經營に譲渡するに至つた。此の間本院活動の狀況は、本會機關雜誌「濟生」第一卷第二號(大正十三年七月三十日發行)に、當時の副院長たる福島東作氏が詳細なる記事を寄せて居るから、其を其儘左に轉載する事とした。

どう動いてゐた?

下谷の濟生會臨時病院は!

醫學博士 福島 東 作

今日から考へればあれだけの建物が僅々四週間の日敷で出来上つたのであるが當時の心情としては何となく妙々しく思はれた工程に焦つゝかたみに斧鉞の音を耳にしながら昨年十二月三日始めて實地診療へ第一歩を踏み出し越えて十一日から入院患者を收容し得たのであつた。
爾後新しく得た經驗も僅少ではなく試むべく心付ける點もないではなかつたが忙しく其日々を送る間に豫定は遠慮なく進んで閉鎖の日、六月末日は来て了つたのである。
「光陰は矢の如し」と今更の事でもないが昔の人の營の妙なものにはしみじみ感心させられるのである。

開院から閉院まで其間どう活動して居たか其れを回顧するのは實際の衝に當つた吾々としては極めて興味深い事であらねばならない。
こゝに我田引水的事は一切抜きにして活動の跡をありのままに數字に表して見たいと思ふ。四眼八目的批評の種にもなるだらうがこれが若しも他の一面に於て病院をやつて行く上の参考ともなり得るならば望外の幸福とする處である。

(一) 先づ第一に病院の大きさ設備に就て一言すべきであると思ふが此點に於ては床數二〇四を有する病院であり内科、小兒科、外科、産婦人科、耳鼻咽喉科及眼科の外來並に入院患者を取扱つたのであるといふ位に止めて置かう。

(二) 次に病院の活動力である醫員及藥局員の數をあげねばなるまい、實際醫療に従事したるもの、實數を詳記すれば左表の通りである。

第一表 醫局及藥局員數

科	十二月	一月	二月	三月	四月	五月	六月
内、小兒科	五	五	五	六	六	六	六
外科	四	四	五	五	五	五	五
産婦人科	二	二	二	二	二	二	三

科	月
耳鼻咽喉科	十二月
眼科	一月
藥局	二月
	三月
	四月
	五月
	六月
	五月

(三) 醫師の診療を助ける看護婦の數も考慮しなければならぬ、然し看護婦の異動は可なり烈しく正確の數字を掲げる事は面倒ではあるが大體に於て看護婦は前後を通じ常に四十五名位在勤したるものと見る事を得べく其内外來係の看護婦の數は左表の通り精確のものであるがこれを除く以外の三十名内外の看護婦は三病棟に分たれたる總床數二〇四の床數に應じて適當に配分したのであつた。

病床付きの看護婦が一人一日當り幾何の患者を看護したかの詳細なる數字は種々の關係からしてこれを精確に算出する事は殆んど不可能といふべきである。

今各科外來に於ける看護婦の配置を月別に掲載して見ると次の通り

になる。

第二表 外來診察所に於ける看護婦の配置數

科	月
内、小兒科	十二月
外科	一月
産婦人科	二月
耳鼻咽喉科	三月
眼科	四月
	五月
	六月
	五月

(四) 第一表及第二表で病院の醫療的活動に必要な役者の員數をあげたこれらの人々が働いた結果はどんなであつたか先づ外來患者の數をあげて見れば左表の通りである。其末尾に各科入院患者全部に亘る延人員數をも加へて見る事とする。

第三表 診療患者總數(外來及入院)

科	十二月		一月		二月		三月		四月		五月		六月		計
	新	再	新	再	新	再	新	再	新	再	新	再	新	再	
内、小兒科	五三	七三	八四	一、九三	一、〇三	一、〇三	四、三七	一、三三	五、〇〇	四、〇〇	三、七四	三、七四	二、五〇	四二	五、一九七
外 科	二四八	二、七六	三、六二	二、七六	四、七六	五、六六	六、六六	五、六六	四、三三	四、三三	四、三三	四、三三	二、七六	二、七六	三、三二
耳鼻咽喉科	七二	三三	一、四三	一、五九	一、六六	一、六六	一、三三	一、三三	一、三三	一、三三	一、三三	一、三三	一、三三	一、三三	一〇、三三
眼 科	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三
産婦人科	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇
小 計	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇
入院患者数(延人員)	三、八四	六、九三	九、〇三	二、九三	四、一七	五、三三	六、四九	七、六五	八、八一	九、九七	一〇、一三	一〇、二九	一〇、四五	一〇、六一	九〇、五九
總 合 計	三、八四	六、九三	九、〇三	二、九三	四、一七	五、三三	六、四九	七、六五	八、八一	九、九七	一〇、一三	一〇、二九	一〇、四五	一〇、六一	九〇、五九

即ち右の表によると昨年十二月三日から今年六月二十七日迄の間に於て

新來患者 一萬二千一百四十名
 再診以上 五萬二千四百七十七名
 合 計 六萬四千六百十七名

の外來患者を診療した事となるが故に之を延人員にしたならば夥しき多數に上る事であらう。

(五) 倍て以上の外來患者に對して入院患者の數は幾何であつたか。

第四表 各科入院患者數

科	十二月		一月		二月		三月		四月		五月		六月		計
	新	再	新	再	新	再	新	再	新	再	新	再	新	再	
内、小兒科	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	二九七
外 科	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三六五
産婦人科	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二二七
耳鼻咽喉科	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一六〇
眼 科	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一九

延 合 人 計 日 計	科 月	
	延 日	合 計
十二月	六五	一七九
一月	二、九七	一、七九
二月	四、七七	一、六
三月	五、三三	三、七
四月	五、二九	一、八四
五月	五、二九	一、四
六月	二、五	七
計	三、七	一、〇六

右表によれば各科に於ける入院患者の總數は

實員一千六十八名で

其延人員は實に二萬五千九百七十五名

に達するのである。これに外來患者の數を合算すれば九萬五百九十二名の多數に上るのである。

茲に附言すべき事は四月以後に於て患者の減少した理由である。これは震火災後其發行に制限を附せなかつた診療券を四月より震火災以前の制度に復舊した爲に減少したものであり。其影響は外來患者、殊に新來患者に於て著しい減少を認める事が出来る。

(六) 入院患者の死亡數と病院に於ける出産數とを比較して見るのは興味ある事である。左表に示すが如く死亡者は、男子七十二名、女子四十二

名、合計百十四名なるに對し出産數は、男子四十八名、女子六十四名、合計百十二名で死亡と出産數とが相匹敵して居るのは偶然ではあらうが甚だ面白い結果になつたものであつた。

入院患者中最も吾々を煩はし然も治療効果の擧らなかつたのは——病氣の性質上已むを得ない事ではあるが——老衰といふより外には何等認むべき病變のないものが相當に多かつた事である。此現象よりして吾々は養老院と治療院とも稱すべきものより一層徹底的な併立の必要を切實に感じたものである。此點に關しては他日稿を更めて述べたいと思ふ。

第五表 入院患者死亡表

科 月	科 月	
	内、小兒科 科(女)男	外 科 科(女)男
十二月	五三	一一
一月	三六	一一
二月	五四	四一
三月	一九	三一
四月	三二	一八
五月	四二	一七
六月	三三	二二
計	二四九	二二二

科	内、小兒科		外 科		産婦人科		耳鼻咽喉科	
	新	再	新	再	新	再	新	再
十二月	四	五	二	九	一	七	一	五
一月	五	三	一	九	二	四	二	八
二月	七	二	四	一	一	五	二	六
三月	七	三	四	〇	四	一	四	七
四月	三	二	二	八	〇	二	一	〇
五月	三	一	二	六	二	八	一	七
六月	三	一	二	四	一	五	一	六
月平均	五	二	三	一	八	一	四	二

次に掲ぐる第七、八、九表の統計は日曜、大祭日等外來診察を休んだ日數を除外する事なしに算出したものであるから實際に取扱つた患者數は増加する譯である、此點を顧慮して見て頂きたい。

第七表 醫員一名に對する外來患者數

(七) 上記の如き外來及入院患者に對して醫員、藥劑師及看護婦は如何に働いたか、換言すれば其能率如何は左の次々の表に依て明に知る事が出來やう。

第六表 出 産 數

科	産婦人科		耳鼻咽喉科		眼 科		小 計		總 計
	女	男	女	男	女	男	女	男	
十二月	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一月	一	一	一	一	一	一	一	一	一
二月	一	一	一	一	一	一	一	一	一
三月	一	一	一	一	一	一	一	一	一
四月	一	一	一	一	一	一	一	一	一
五月	一	一	一	一	一	一	一	一	一
六月	一	一	一	一	一	一	一	一	一
月平均	一	一	一	一	一	一	一	一	一